

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 幸松 英恵

本論文は、現在においても日本語文法研究の中で論議が絶えない「ノダ文」を正面から取り扱った意欲的な研究であり、10章によって構成されている。

第1章は、研究の背景、対象、方法、用例について述べられている。

第2章は、主として先行研究がまとめられ、その先行研究に対する本論文の立場が述べられている。本研究は、ノダ文の本質をあくまでも「事情説明」と捉え、方法的にはノダ文の命題内容を、「知識」、「推論の結果」、「現場知覚」の三種に分けることによって、その説明の構造が適切に記述できるとしている。

第3章は、「知識の文」のノダを、非会話文（地の文）を中心に、「原因理由説明」と「詳細説明」の二種に分けて記述している。特に「詳細説明」では、「原因理由説明」としては説明しきれない言い換えタイプのノダ文について、さらに細分化を加えて精密に記述している。

第4章は、「知識の文」で会話文の場合を、第3章同様、「原因理由説明」と「詳細説明」の二種にわけて記述している。特に、会話文特有の発話現場に密着したタイプについて指摘がある。

第5章は、「推論の結果」としてのノダ文について、ノダとノダロウの両形式に渡って考察している。

第6章は、発話現場における「知覚（情報）」をノダで表すタイプのノダ文を考察している。現場の描写にあたるような内容がなぜ「説明のノダ」で表現されるのか、これは先行研究でも問題にされてきたもので、本研究は「何らかの前提（想定や期待）」の存在から、このタイプのノダ文を説明する。分かりやすい説明である。

第7章は、ノダロウとダロウやラシイとを比較して、ノダロウ型推論の特徴を明らかにしようとしている。

第8章は、命令・決意・忠告などを表すとされるノダ文を、「事情説明」タイプからの広がりとして捉えようとしている。特にその際には、連文関係の中で「命令・決意・忠告」等のノダ文を位置付けることが重要であり、事実そのようなノダ文は同時に考えられる用例が多いことが指摘されている。また「強調」と呼ばれてきたノダについても、同様の指摘がなされている。それとともに、これらのノダ文は、近代日本語でノダ文が定着し大いに使用された結果として、文法化がより進んだ形式とも述べられている。

第9章は、ノダ文の韓国語への翻訳例を通して、日本語のノダ文の特徴を改めて観察している。

第10章は「結語」である。

本研究は、ノダ文の根本的な構造を「～ノハ～ノダ」という形式とみなし、そこから「～ということは～ということだ」という意味を導き、ノダ文の基本を「事情説明」と位置付けている。このこと自体は特に新見というわけではないが、そこから従来「説明」と呼ば

れてきたノダのみならず、ノダ文の全般を巧みに説明している。ノダ文については、様々な見解がせめぎ合っているというのが研究の現状であり、その中でノダ文の本質について、「事情説明」から一貫した論理を展開している点に本論文の特長がある。また非常に大量の用例を調査して、本論中にもそれらを示しており、それら用例の詳細な点検が、随所で細部における新見をもたらしている。このように全般的かつ詳細なノダ文の記述は、先行研究にも類を見ない本研究の特長と言えそうである。

しかし、著者も述べているように、ノダ文は近代日本語においてその表現性を拡大していったようである。本論文は基本的には現代日本語という共時態のノダ文を対象としているが、それがどのように表現性を拡大していったかは、著者の論旨のみならず現在のノダ文研究の有効性をはかる意味でも重要であろう。本論文はその側面でも先駆的な考察を加えたものであって、今後のノダ文研究の水準をさらに向上させてゆくことが期待できる。

本論文の特長は、第一に、膨大な用例を一々検討することによって得られた着実性である。ノダ文については、ここ数十年議論が絶えることなく続いているが、それらの議論にはしばしば観念的な思いこみによる強引な論理展開が目立つ。著者は文脈を含めて個々の用例を詳細かつ柔軟に検討することにより、例えばいわゆる「発見のノダ」のケースなど、各用例の見逃しやしやすい性質や用例間の思いがけない共通性などを適切に指摘している。このことが本論文の信頼性を高いものにしてしている。第二に、ノダ文の中心的な機能を「説明」とすることによって、論理構成に全体を見渡しやすい一貫性が得られている。ために、一見例外的と思われる事例の中にも一般性の高い性格を興味深く指摘することに、しばしば成功している。また論理が一貫することによって、かえって例外的な事象の指摘にも成功しているケースが認められる。

ただ、この特長の第一点と第二点とは、常に美しく調和するとは限らない。第8章の「命令・決意・忠告のノダ」において、当該タイプのノダと「説明のノダ」との共通性については新発見も伴って巧みに説明されているが、その指摘は「命令・決意・忠告のノダ」の性格の一面に止まっていると述べるを得ない。しかし、この点著者は柔軟であって、論旨は強引に終始することはなく、近代におけるノダの文法化の過程で用法の拡張が生じてきたと思われることを示唆している。その意味で本論文は、ノダ文研究の現状の水準とともに今後の研究の方向性をも示している点で、貴重であると考えられる。

したがって、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するのにふさわしいものと認定する。